

社会的随伴性に対する新しいアプローチ (2)

言語使用における社会的随伴性

A new approach to social contingency (2): Social contingencies of language use

宮崎 恵彦

Yoshihiko MIYAZAKI

ワイカト大学(ニュージーランド)大学院

Department of Psychology, The University of Waikato

Key Words: 言語行動、社会的随伴性、社会的構築主義、言説心理学、機能分析

I. 言語使用における随伴性の新しい機能的分類

Guerin (2004)は、日常場面における言語使用の随伴性について、社会的交換システムを視野に入れたものとして、以下の三種類の機能的分類を提唱している。

(1) 人々に何かを行動させる機能

(2) 人々に何かを言わせる、あるいは信じさせる機能

(3) 社会的関係を維持させる機能

そして、これらの言語使用の随伴性は、

(4) 発言の結果生じることを変容させる機能によって修飾されていると考えられている。

1. 人々に何かを言わせる、あるいは信じさせる機能

この随伴性により、話し手は、社会的交換システムを通じて、聞き手の将来の行動、および第三者の行動の制御が可能となる。それを容易にするための様々な方略は、社会的構築主義の立場に立つ、Potterらの言説心理学者によって、近年盛んに研究されている。

2. 社会的関係を維持させる機能

単に聞き手の注目を維持させることに始まり、

'Phatic Communion' (マリノフスキー) や共同発話もこの機能を持つと考えられる。さらに、集団内における話し手の評判を維持、向上させる機能を持つ随伴性も考えられる。

3. 発言の結果生じることを変容させる機能

話し手は、言語使用を修飾することで、望ましくない結果を変容させることが可能となる(オートクリティック的な機能)。

II. 新しい随伴性の分類と行動分析

これらの新しい随伴性を、従来の行動分析学の方法論で検証することには困難が予想される。しかし、この枠組みを、社会における行動的問題の機能分析に使用することは可能である(Guerin, 2003)。

III. 引用文献

Guerin, B. (2003). Combating prejudice and racism: New interventions from a functional analysis of racist language. *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 13, 29-45.

Guerin, B. (2004). *Handbook for analyzing the social strategies of everyday life*. Reno, Nevada: Context Press.

